



地域内連携による新たな農村体験プログラムの可能性

有限会社アグリテック 代表取締役社長 中田 浩康

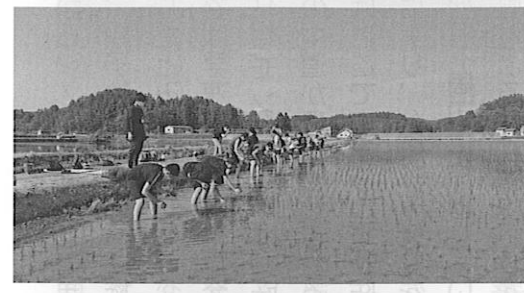


コロナ禍による体験内容の見直し

北海道のほぼ中央部、北海道最高峰旭岳を有する東川町は、大雪山に降る雪解け水が豊富で、全国でも珍しい上水道のない町でもあり、道内有数の米どころとして水田が広がる人口約8400人の町だ。

そんな東川町を拠点に、弊社では農業体験や自然体験のほか、アウトドアや創作体験など、多様な観光プログラムの提供をおこなう地域観光の一元窓口としてコーディネート事業をおこなっている。

教育旅行においては平成一七（2005）年より、都市部の学校を中心に年間20校近く、約2000人あまりの受入れをおこなっている。とりわけ農業体験や農家民泊体験は、人気のプログラムのひとつだ。



農業体験の様子（田植え）

コロナ禍となり修学旅行の中止や方面変更を受け、この2年で教育旅行の受入れは3校のみ。コロナ禍の中、より安心なプログラムへの見直しや、新たな農村体験プログラムの検討をせざるを得ない状況が続いていた。

そんな中、教育現場では学習指導要領の改訂で、探究学習やSDGsなどをテーマにした授業が始まり、教育旅行にも盛り込む学校も増えてきた。

農家完結型ではない新たなプログラムづくり

もともと弊社で人気の農業体験は、「食べる」という人間の大切な営みがテーマである。「食が生まれる現場」を知ってもらい、「食育」や「生きる力」「自然と人間の関係」などを、農家さんとの交流や生活体験を通して学んでもらうことをコンセプトに実施している。

それをさらに深掘りして、農家完結型の体験でなく、そこで収穫された農産物がどのような過程を経て食卓に届けられ、自分とどうつながっているかを考えたり解決したりするプログラムとして、昨年より農家を含む農山村全体をフィールドにした「SDGs型食農

探究学習」として提案をおこなっている。

具体的には、案内ガイドがバスに乗り込み同行しながら、農家さんやその環境（農村地域の自然環境等）の案内、そしてJA（農協）倉庫といった農業関連施設の見学などをおこなう2〜3時間ほどのプログラムだ。

はじめに農家さんでの体験だ。体験人数は、1農家あたり1クラス40名程度（1バス単位）の受入れを基本に、10人程度の4つのグループに分かれてもらい、予め準備した4作業または4行程）を約1時間体験してもらう。例えば5月の田植え時期であれば、①手植え作業班、②機械植え班、③苗箱洗い班、④米ぬか活用班（畑の肥料づくり等）に分かれ、それぞれの作業を通し、後日事後学習にて全体共有する。また、それぞれおこなう作業に合わせ、①では「田植えの歴史」、②では「農機具の変遷」といったテーマを、事前学習として学校に提案し、各班で調べてから当日を迎えるようにしている。

体験後はバスの車窓からガイドが生産現場の環境（農地利用や灌漑設備、農業を取り巻く自然環境など）を案内しながら、JAの農



JAの農業倉庫見学

業倉庫へ移動。収穫された農産物がどう出荷され食卓まで届くのかをJAの職員に案内していただきながら、一連の農産物の流れを学んでもらう。

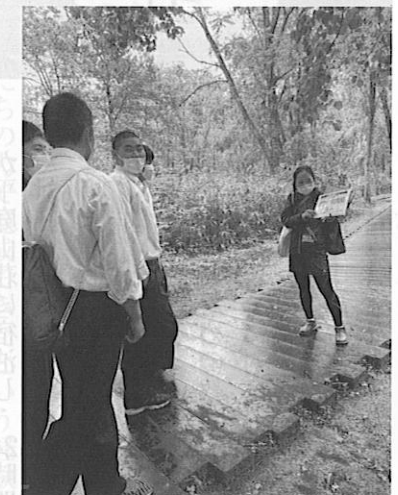
本プログラムのキーとなるのは同行するガイドだ。ガイド役は現在弊社スタッフが中心に担当しているが、行程の管理のほか、テーマや学びの内容が訪問先毎に散漫にならないようにファシリテーター的役割を担う。また、最後に振り返りをおこない体験学習としての学びをまとめる役割もある。

農業体験といえば単純に「農業＝農家」ということではなく、農業を取り巻く自然環境やJAをはじめ農業関連団体などでの体験や見学も、農業という産業のひとつであること、このような団体や事業者と農家さんとが関連し合っていることを理解してもらおう。

このような体験を通して生徒からは、「畑から食卓に届くまで多くの人が関わっていることを知った」「このような農業倉庫などで管理されているとは思わなかった」など関心の高い意見を多くいただいている。また、実施した学校や旅行会社からは、来年もぜひおこないたいという評価もいただいている。

持続可能な社会の実現に向けた共有

そのほか、東川町のマチ歩きをしながらミッションをクリアする「マチ歩きBINGO



水育ツアーの様子

〇体験」や、水資源が豊富なことから水について学ぶ「水育ツアー」、シカやクマなど野生動物と人間の関係性を学ぶ「動物環境学習」などのプログラムもある。また、町内には国内で唯一の町立日本語学校があり、そこに通う留学生らとの国際交流や、アイヌ文化体験など、東川町らしいプログラムの提供もおこなっている。

一方で、既存の体験についても、例えばラフティング体験では、「この水は大雪山の豊富な雪解け水の貴重な資源だ」ということを事前学習として学んでもらい、体験後は川のゴミ拾いを通して、環境問題への気づきや、この水が田んぼに入り農業生産の貴重な資源となっているといったように、プログラムひとつひとつが農山村全体につながっているという気づきになるような提案もおこなっている。

これらのプログラムの受入れ人数は40〜80名ほどと限られるが、いずれも半日（2〜3時間）程度のプログラムにしており、人数の



マチ歩きBINGO



町立日本語学校で留学生と交流

多い学校などは、午前と午後と入れ替えなどをおこない、すべての生徒に共通したプログラムの提供ができるよう工夫している。

農山漁村の持つ教育力を体験プログラムとして提供しながら、「生きること」に欠かせない「食」や「水」がどこか遠いところの誰かがつくっているといった「他人事」ではなく、「自分事」として関わりやつながりを感じてもらえるようなプログラムとしてのブラッシュアップをしていきたい。一方で、農山漁村の持つ価値や役割をみんなで共有し、持続可能な社会の実現に向けた農山漁村の新たな教育旅行コンテンツとして、引き続き取り組んでいければと考える。

【問い合わせ先】
有限会社アグリテック
北海道上川郡東川町西町2丁目2-17
TEL 0166-82-0800
FAX 0166-82-3040
e-mail: info@agritec.co.jp